

水と炎

第三卷

東京小町

主な登場人物・国

□ナジャ家□

■キト・ナジャ ■レアレス公国の国境付近、元はハットカバス自治区だったカトロス出身の少年。炎の神・カーミラの術者。肌は褐色、髪は黒、碧眼。

■シロウ・ナジャ ■キトの父親。元は大工だったが、生活のために鉱山の仕事を始めた為、鉱山特有の肺病にかかってしまう。肌は褐色、髪と目は黒。

□レジストン家□

■カルーア・レジストン ■レアレス公国において最も巨大な企業、レジストン財団の御曹司。生まれつき水の神・ウオーラの術者。肌は白、金髪、碧眼。父親の意向で、十八歳未満だが術法研究所でボランティアをしている。

■カンパリ・レジストン ■カルーアの祖父。レジストン財団の会長。若い頃神学を専門に勉強していたので、神に詳しい。カルーアの能力をいち早く見抜いた。カルーアの数少ない理解者。

■カシス・レジストン ■カルーアの父にしてレジストン財団の社長。丸八年息子と顔を合わせていない。

■マドラー・シングルトン ■カルーア付きの秘書。マーシャルアーツ（格闘技）に長けている。

□術法研究所

■リンダ・ウインダム ■術法研究所所長。緑の神オアの術者。肌は白、髪はブルネット、碧眼。

■ミリー・マリアノ ■術法研究所に所属する術者。紙の神ピルスーリの術者。リンダの親友でもある。肌は白、髪は紫（染めている）、碧眼。

■ドクター・クリスプ ■ハットカバス王国出身の術法研究所付きの医者。雷の神ラージの術者。肌は白、髪と目は黒。

□その他

■フィクサー ■カルーアのクラスメイトのガキ大将。キトを集団リンチしたところを、カルーアが助けた。

■サクラ・エコルノ ■首都にやってきて、身寄りがなくなってしまったキトの面倒をみる、国から斡旋された養母。ハットカバス人のような名前だが、れっきとしたレアレス国民。

□国・地域

■レアレス公国 ■民主主義制度の、世界に対しても強い影響力を持つ大国。軍隊を持ち、近隣のハットカバス王国とは歴史上何度も戦争をしている。

■ハットカバス王国 ■レアレス公国の南方に位置する軍事国家。代々術者を輩出する血筋のハットカバス一家が支配している。

■ハットカバス自治区 ■ハットカバスが自治を認めている地区。

前巻までのあらすじ

レアレス公国の田舎に住む少年、キト・ナジヤは父親シロウの病気を治すために、首都であるレストンに列車でやってくる。キトは炎の神カーミラに守られる「術者」だった。その力を使ってポランティアをする見返りに、シロウの治療をするという取引を少年は国と行ったのだ。シロウは無事入院し、キトは国が斡旋してくれた養母・サクラの家で暮らすことになる。そして首都の子供の義務である学校にも通わなければならなかった。

同じ学校でキトは水の神の術者、カルーア・レジストンに出会う。女神同士はすぐに打ち解け会うのだが、キトとカルーアはいまいちだった。それを見たフィクサー率いるガキ大将軍団は人気のないところにキトを連れて行って集団リンチを行う。

そこに現れたのは、カルーアだった。フィクサー達はカルーアの能力を知っていたのですぐに謝ったのだが、にも関わらず、カルーアは呪文を唱えてフィクサーを水球の中に閉じ込めたのだった。「彼は僕と同じ」というカルーアの言葉にカッと化したキトはカルーアを殴りつけ、「お前と一緒にするな！」というのだった。二人の関係はぎくしゃくする一方だった。

そんな折、いよいよ術法研究所でキトが神の能力を披露する時が来た。だが呪文を唱えて大きな炎を生かさせたキトは、大声で叫び、制御不能に陥ってしまう。炎はなんとか収めたが、困り果てる術法研究所の面々。しかしそこでカーミラが、キトは今まで呪文を使ったことがな

いのだという衝撃の事実を明らかにする。

ピンと来たドクター・クリスプはキトの父親が入院している病院へ向かった。そして、キトのカーミラは今亡き母親から受け継いだものではないかと問う。

ドクターの読みは当たった。キトのカーミラは母親から受け継いだものだった。だが真実はもっと壮絶だった。故郷に帰った際にシロウが幼馴染と浮気してしまったことを知ったキトの母は、自らの能力で焼身自殺してしまったのだ…

そして術者が死んでしまった神は、転生を迎え、二歳のキトを守るようになったのだ。

呪文を唱えた後気絶したために病院に運ばれるキト。父親と同じ病室で、キトは前代のカーミラと母のことを明かされる。しかし何と言ってもいいから分からず、親子は隣通しのベッドで背を向け合うのだった。

後日、術法研究所を訪れるキト。カーミラは実体として呼び出して、連れてこなかった。そしてリンダと話をする。リンダは、本来ボランティアとは自分のために行うものなのだ、と説く。そして、できるだけカルーアに協力してもらった方がいいと言う。キトもそれは十分に感じていた。

一方、一日の用事が終わったカルーアは車で家路につこうとしていた。マドラーが「何かやりたいことをする時間があってもいいのではないのでしょうか」というと、カルーアは「キトと友達になりたいかな…」と答えるのだった。

神と術者について

- ・自然物、人工物などを司る。見た目は全て女性で、姿は様々。「神」「女神」「物神（ものがみ）」とも呼ばれる。
- ・物神は特定の人間について、その人間を守る。守られている人間を「術者」という。
- ・術者は物神の力を「呪文」を唱えることによって使うことができる。呪文は神によって違う。
- ・物神は通常、うっすらとした姿（幻影）となっていて、術者以外の人間にはその姿を見ることはできない。また、術者と五十メートル以上離れることはできない。（実体は無制限となり、遠隔で術者と物神で会話が可能となる）
- ・物神の幻影は天然の寶石を身につけることで消すことができる。しかしその場合、その術者は呪文を使うことができなくなる上、他人の物神も見えなくなってしまう。
- ・術者は物神を実体として呼び出すことができる。そうすると、術者ではない者にも神の姿が見えるようになる。術者は呪文を使えなくなるが、神が直接能力を行使できる。
- ・術者が物神を実体として呼び出すと、身体がうっすらと光り、術者だけにはそれが見える。
- ・物神は術者が死ぬまで術者についている。術者が死ぬと、転生を迎え、別の術者につくようになる。転生後の物神は転生前の記憶を持たない上、見た目などもまるで違う場合もある。
- ・物神と術者（男性のみ）の間に生まれた者を「精霊」という。人間の二倍の寿命を持ち、呪文を詠唱しなくとも神の力を行使することができる。術者同様、他の物神の幻影を見ることができる。術者が死んでも、精霊の能力はなくなるらない。
- ・物神には序列がある。例えば、太陽の神は炎の神の上級神、海の神は水の神の下級神である。

三章 生と死

— 1 —

それは、何の前触れもなくやってきた、と誰もが思った。
：たった一人を除いては。

その日、その時間の三十分程前、キト・ナジヤは手書きの地図を頼りにレアレス公園首都のレストン市の郊外を歩いていた。

その地図はカルーアのことをリンチしたクラスメートが書いたものだった。手書きの地図の行き先は、カルーア・レジストンの自宅だった。

久々に登校し、カルーアに謝ったものの、「友達になれないかな？」という言葉に動揺して逃げてしまってから寝て起きて、キトは幾分か冷静になることができた。

友達云々はともかくとして、自分にはカルーアが必要だ、ということとはキトも十分理解していた。

自分の暴走した能力を抑えうる唯一の能力を持つカルーアは、能力の向上を願う自分にとってではなくてはならない人物なのだ。

神の能力を何のためらいもなく発動させ、能力のない人間を見下ろして制裁を加えた力

ルーアのやり方は決して情に深いものとは言いがたい。

だがそれに対して、同じ能力を持つ自分が鉄拳で制裁を食らわせる権利があったのだろうか。自分は能力すらも制御できない。

ひよっとしたらおれは、カルーアに嫉妬した気持ちも持っていたのかもしれない。

考える前に身体が衝動的に動いたので、何を思ったかなど今更知る由もないが、いろいろと考えてみると、あの時はいろいろな感情が一気に噴出したような気がする。それも、とてもどす黒いものが。

そんなものを何の事情も知らないカルーアに浴びせた自分に比べたら、持ちえる能力で最大限の効果ある制裁を加えたり、何の人の顔色も伺うことなく友達になれないかと聞いたりするカルーアはずっと大人なのかもしれない。

とにかく、このまま何もしないでいいわけはなかった。カルーアと話をして、能力を制御できるように訓練する手助けを頼むつもりだった。

キトは意を決して学校に行ったのだが、予想に反してカルーアは登校していなかった。担任に尋ねてみると、カルーアはしばしばボランティアのために学校を休むことがあり、いちいち届け出はしていないとのことだった。

キトは途方にくれかけたが、またもやる気を発奮させて今度はカルーアのクラスに出向

いた。他に顔と名前を知る生徒がいないので、キトはフィクサーにカルーアの家の場所を尋ねた。

フィクサーは、キトがカルーアを殴ったことを知っていたので、キトを警戒した。

「お前は転校生だから知らないだろうけど、あいつ水の神の術者なんだぜ。あいつが本気を出したら、人ひとり殺すくらいどうってことない。ケンカ売るのはやめろよ」

「誰がケンカ売って言ったよ。話をしに行くだけだよ」

キトは鼻で笑った。

「って言ったって、向こうはそう思わないかもしれないじゃないかよ」

キトは大きいため息をついて説明をした。

「殴ったりしたことについてはもう俺は謝ったよ。向こうも納得してる。つかお前カルー

アの家知らないの？ 知らないなら知ってるヤツに聞くよ」

やっとのことで、フィクサーが椅子に座ったまま、キトの方を向いて喋り出した。

「知らないヤツなんていねえよ。あいつの家はレジストン財団なんだぜ。この国一番稼いでる企業だ。だからカルーアの家もレジストン財団本部の側にあるんだよ」

「…俺、この都市に来たばかりだから分からないだよ」

フィクサーは溜息まじりに、机の上に置いてあったノートを後ろから開くと、最後のページに地図を描き始めた。

「そもそもお前がよってたかって俺をリンチしたりしなきゃ、こんなことにはならなかったんじゃないか。神の能力が怖いくせによくあんなことできたよな」

「あいつが来たらやめただろ、俺らは。それで済むと思ったんだよ。まさかあんなにキレられるなんて思わねえよ」

確かに「キレる」という表現は正しいな、とキトは思った。

普段あれほど温厚そうなのに、あの報復はやり過ぎだ。

「キレるといってもああなのか？」

「まさか。あいつは怒ったこともねえよ。前にいじめにあつた時も黙って耐えてたぜ」
キトは思わず口をつぐんだ。

自分の時ですらキレたことはなかったというのに、何故？

「ほら、できたぜ。説明してやるよ」

フィクサーの書いた地図は分かりやすかった。一応説明もされたが、この紙を見ればなんとか辿りつけそうだ。

「お前は俺をリンチしたことについてはまだ謝ってないからな、礼なんていわねえぞ」
その言葉に、フィクサーの目の色が変わった。カチンと来たようだった。

「何だと!？」

フィクサーが声を荒げたので、それまで騒がしかった休み時間のクラスAは一瞬にして静まった。

結局こいつはどこまでもこういう奴なんだな、と思いつながらキトは言った。

「そーいやお前には言つてなかったな。実は俺も術者なんだよ」

「証拠を見せるよ」

フィクサーは動揺すらしていない。半ば笑いながら言った。

キトは黙ってカーミラを実体として呼び出した。

わざと天井近くに実体を現したカーミラは、赤い髪をなびかせながらゆっくりと教室の地面に着地した。

教室中の生徒が、突如現れた真紅の女神に釘付けになっている。

背の高いフィクサーよりもさらに背が高い、大人の女性カーミラはけだるそうな目でフィクサーを見ると

「キトをいじめたら、私が承知しないわよ」

と言い、パチンと指を鳴らした。

先ほどフィクサーが地図を書いて破ってキトに渡した元のノートが、音を立てて炎を上げ始めた。

「わっ！！！！」

フィクサーは驚いたが、炎から飛びのいて何もできないでいる。その間もノートは燃え続けている。

カーミラがため息混じりに再び指を鳴らすと、炎が消えた。

「これでチャラだ」

キトは教室を出て行った。ノートは全て灰になっていた。

キトは、示された地図の通りの場所に来ていた。
来ていると思うのだが、ここがカルーアの家だという確証は持てないでいた。

そこは個人宅というよりは、広大な敷地を持つホテルという趣だったからだ。

キトの身長のように五倍程度はありそうな石造りの柵がずっと続いていて、格子の間から中はよく見えるもの、その敷地内も広大な庭のかなり先に相当大きな建物があり、その建物もあまりに豪勢過ぎてなんの建物なのかの判別すらできない。

格子が両開きのドア状になっているところなので、ここが入り口なのだろうが表札も何もついていない。

格子の扉の上部を見上げると、鳥のモチーフの装飾がついている。家紋なのだろうか、だがそれすらも何の手がかりにもならない。

「地図が正しいとすればここに間違いないけどね」

カーミラはキトの頭上のずっと上から屋敷の中をのぞきこんでいる。

「あのさあ。…ここってどうやって入るわけ？」

「格子を開けるんじゃないの？」

「開くのか、これ」

「やってみればいいじゃない」

「でもさ、普通入る前にはノックするだろ。でもここはそんなことしても意味はない。どうやって俺が来たことを中に知らせるんだよ。知らせる前に入るのはマナー違反だろ」
キトはこの都市に来る前に、シロウに口酸っぱく言われていたことをそのまま言った。

カーミラは上空から建物の方を凝視して

「どうもウオーラの幻影も見えないわねえ…この距離だと…さすがに…」

「困ったな」

キトは辺りを見渡したが、キト以外には誰もおらず、尋ねてみることもすらできない。

そもそもこの郊外にあるものといえばレジストン財団くらいなので、どこかに向かう途中の通行人など捕まえられる筈もない。もしここが入り口ではないのだとすれば、人を捕まえることはさらに難しくなる。

「キト、少し行って、中見て来ようか？」

「…それしかないな。頼むよ。もしカルーアがいたらそれが一番手っ取り早い」

「分かった」

キトはカーミラを実体として呼び出した。カーミラはそのまま柵の上を飛び、屋敷の敷地内に入っていた。真っ直ぐ正面の大きな建物を目指して飛んでいく。

キトは格子の隙間からその様子を見守っていた。

「この屋敷に用なのかい？」

いきなり背後から男の声がして、キトは心臓がつぶれるかと思うくらい驚いて、同時に飛びのいた。が柵にべったりと張り付いていたため、キトは身体を百八十度回転させて自

ら背中を柵に押し付けたに過ぎなかった。

「痛っ」

「大丈夫かい、驚かすつもりはなかったんだけど」

見ると、フードつきの黒いローブをすっぽりと被った顔の見えない人物が立っていた。

大人なのだろうが、上背はあまりない。もつともキトよりはずっと背が高いが、シロウやドクター・クリスプよりも背は低い。

頭を覆うフードは、キトの身長では下から見上げる形になるにもかかわらず、中は真っ暗で何も顔が見えない。

当然キトは警戒した。

カーミラが飛んでいってしまった、こんな時に。

「用なんだけど…あの…ここはレジストン財団の建物であってるんでしょうか。入り口ってここなんですか？」

「入り口はこの他にもあるが、基本的にここはアポイントなしじゃ入れないよ、坊や」
アポイントの意味が分からず、キトは聞いたものかどうしようか目を泳がせた。

「それより、早くここを立ち去った方がいいよ。命が惜しいからね」

「え？」

キトが聞き返した時にはもう、ローブの人物は踵を返して歩き出していた。

声をかけようかと思ったが、本能がそれを阻んだ。これ以上関わらない方がいい、なんとなくそう思ったのだ。

それにしても、命が惜しいなら帰れとはどういう意味なのだ。

キトは心の中でカーミラに呼びかけた。

『カーミラ、戻れ』

『どうしてよ？』

『何か嫌な予感がする』

そう言ったつもりだったが、最後の言葉までは言い切れなかった。

何が起こったのか、最初キトには分からなかった。

立ちくらみでも起こしたのかと思った。だがそれはすぐに違うのだと分かった。

地面が激しく揺れていた。

この世のものとは思えない現象だった。同時に近くの塀が崩れ落ち始めていた。地面から何かどす低い音のようなものが聞こえる気がした。

キトは倒れそうになり、地面に手をついた。あまりに揺れがひどいので、そのまま立ち上がることもできず、四つんばいになって耐えるのがやっとだった。

これは、一体、何なんだ。

「キトっ！！」

戻ってきたカーミラがキトを呼んだ。キトは揺れに耐えながらやつのことで顔を上げた。

「何か割れるような、ピシッという音が聞こえた。」

カーミラから視線を外すと、今キトがいる道の先の方から、何かがちらに向かって迫ってくる。

迫ってくるわけではなかった。地面が割れていて、亀裂の先端が段々こちらに来ているのだ。

「あ…」

このままここにとどまっていたら、亀裂の中に巻き込まれてしまう。そう思っても、キトは身体が固まってしまい、指一本動かすことができなかった。

「キトっ！」

実体のカーミラが、キトの身体を抱えた。既にその段階で地割れの先端はキトのつま先一メートルの距離にまで迫っていた。

身体は宙に持ち上がった。下を見ると、先ほどまで自分がいた地面が大きく二つに割れていた。

カーミラは、キトを上空に逃していた。先程レジストン財団の敷地を見ていた時よりもっと上空にカーミラは飛んでいた。

見渡しのきくところから改めて見て、この現象の物凄さが目の当たりにできた。

地面はまだ揺れているようだった。レジストン財団の塀は大部分が崩れ、大きな鉄格子

もばったりと敷地側に倒されていた。中の建物も徐々に崩壊してゆく。キトが今まで一度も見たことのない、恐ろしい光景だった。

「これは：地震よ」
カーミラが言った。

二人には分からないことだが、この地震はレアレス有史以来初の規模の地震で、時間によれば約三分の出来事だった。

元々地震がないとされていたこの都市の建物の多くは倒壊し、市民の約半数は死亡もしくは怪我をするという、歴史に残る未曾有の大惨事となったのだった。

キトにはとても長い時間に思えたが、実際は五分と揺れていなかったのだ。だがその間に、眼下のカルーアの自宅の建物は無事なものごとつとなくらい、崩壊してしまった。

崩壊した瓦礫から生じる煙をまともに受けてしまうため、カーミラは地面に近づいてキトをそつと下ろした。

門の外から見た美しい建物が、今は黒と灰色の壊れた瓦礫ばかりになってしまっている。
「ひどい……」

キトは瓦礫に向かって歩き始めた。

「危ないわよ……」

「人が中にいるかもしれないだろ」

「あなたに何ができるの……」

「炎を操れるよ。つたないけどな」

地面近くの瓦礫から煙が噴出し、さながら火事のようになっていた。と、思ったら本当に瓦礫から炎が上がり始めた。

「シューエー!!!」

何の前触れも無くキトは呪文を唱えた。カーミラを幻影に戻すのとはほぼ同時のタイミングだった。

上がった炎はやがて収まった。

「キト……」

カーミラはそれ以上何も言えなかった。

「できるな……」

キトの心臓は高鳴っていたが、前に術法研究所に行った時よりはずっと落ち着いていた。ちよっとだけ、自信がついたような気がする。

「カルーア！ いるカー！ カルーア……」

キトは叫びながら建物の瓦礫の方に近づいていった。大きい建物の方からも炎の手が上がっていた。

「シューエサイ……」

空高く上がった炎はやがておさまった。

「キト、気をつけてよ」

カーミラが後ろから心配そうに話しかけてきた。

「カルーア……」

「うう……助けてくれ……」

瓦礫の下から、人の声があった。近づいてみると、つま先だけ表に出てそれ以外が瓦礫の中に入ってしまったている人物がいた。

「おとなしくしててくれ。カーエサイ……」

瞬く間に物凄い炎が、瓦礫を包んだ。

「何する気！？」

カーミラが叫んだ。

「サイサイサイサイ！！！！！！！」

キトはさらに叫んだ。炎は白くなり、瓦礫を溶かして蒸発させ始めた。力をうまく制御できているようで、キトは汗一つかいていない。

やがて人が乗っていた瓦礫は一センチ程度の厚みになり、人は自力で脱出できた。炎の影響も受けてはいないようだ。

「助かったよ、ありがとう。術者なんだね、君も」

その男は庭師という感じのいでたちをしていた。建物の外にいたのかもしれない。

「おれ、カルーアに会いに来たんですけど、どこにいるか知りませんか？」

「カルーア様か。分からないなあ。お戻りになっていないかもしれない」

そうであればありがたい話だが、この瓦礫の下敷きになってしまっていたとしたら…。キトは胃がずっしりと重くなるような感覚に襲われた。

まだ話したいことがあるのだ。それに、教えて欲しいことも。

どうか、生きていてくれ。

「カーミラ、片っ端から溶かして人を助けるぞ」

「この広大な屋敷を？ ムリよ、その前にあなたの気力がつきるわ」

「それでもやるよ。カルーアを一刻も早く探さないと」

キトはイラッとしたような口調で言った。

「でも、屋敷にいらっしやらない可能性も高いですよ。そちらを先に調べたほうがいいん

じゃないのかな」

庭師らしき男が言ってきた。

カルーアが家にいないとすれば、他にいる場所は術法研究所か、ボランティア先だ。ボランティア先は、術法研究所に行けば分かるだろう。

「じゃあ、先に術法研究所に行こう」

術法研究所も無事であるという保証はないが。

「賛成だわ。連れて行ってあげる」

キトはカーミラを実体として呼び出した。庭師の男が驚いて、飛びのいた。

キトを抱えたカーミラが空に向かって吸い込まれていくのを、庭師らしき男が見送った。

術法研究所は、四階建ての建物である。

先のレジストン家よりは半分くらいの高さであるせいから、倒壊は免れていた。

研究所の外では幾人もの人が救助活動にあたっていた。ケガをした人が並べられている
 一帯もあり、ドクター・クリスプや看護婦がそこにいた。

周囲を見回して、キトは思わず声を上げた。

「カルーア!!!」

その声にも本人も振り返った。カルーアは術法研究所の奥の方で発生している火災を消し止
 めている最中だった。

よかった。家に帰っていなくて本当によかった。キトは心の底からほっとした。

安心して元気が出てきたので、目の前の炎を見て呪文を唱えた。

「シューエ!!!」

炎はあっという間に消え去った。カルーアは、少なからずとも驚いた顔をして、それから
 キトの方に向き直って

「ありがとう」

と礼を述べた。

「すごいね、水で消すよりも一瞬で消し去ってしまえるんだ」

「炎のことだからな」

「これでこの建物は鎮火したみたいね」
ウオーラが周囲を見渡して言った。

「カルーア！ こっちに水をください！」
ドクター・クリスが叫んでいた。カルーアは走っていった。

キトはリンダがいなかったのかと周囲を見回したが、姿は見当たらなかった。ひよつとして
…と思い、ドクター・クリスのところまで行ってみると、あちこちから血を流した無残
な姿のリンダがいた。

「キト…来てくれたのね」
「喋るな」

ドクター・クリスがリンダに命令調で喋るなど、カルーアは今まで聞いたことがなかつ
た。

「ウオー」
カルーアが呪文を唱えると、両手に作った鉢に水が染み出てきた。

「傷にかけてください」

カルーアは慣れない手つきで、リンダの傷に水をかけてゆく。その間にドクター・クリス
プは医療カバンから傷を縫合するための道具を取り出し始めた。

キトはドクター・クリスプなら知っているだろうと思って話しかけた。

「ドクター、これって地震っていうんですよね」

「自然現象の一部ですが、これは尋常ではない。術者の仕業の可能性も否認しません」

それを聞き、キトは忘れかけていたことをハッと思い出した。カルーアの屋敷の前で話しかけてきたフードの男。

命が惜しいなら逃げろといってきた男。

あの男が、この地震を引き起こした術者だとしたら…？

ドクター・クリスは注射器を持ち、針の先から液を少しだけ飛び出させた。

「チクツとしますよ」

リンダに注射が打たれた。しばらく待って、ドクター・クリスは患部に触った。

「感じますか？」

リンダは「喋るな」といわれたことを忠実に守り、首をだるそうに横に振った。

針と糸を使い、ドクターは傷を縫合していく。カルーアは思わず顔をそむけた。

「なあ、カルーア」

「なに？」

カルーアはキトの方を振り返った。

「他にもあちこち火事になっていたり、建物が倒れているところがあるかもしれない。助けに行かないか」

「ちよつと待ってください」

ドクター・クリスが作業をしながら口を挟んできた。

「行っちゃいけないのかよ！」

「そうは言っていません。二次災害を防ぐためにも、しかるべき準備をしてから取り掛か

るべきです。それに、こういう状況だと術者が呪文を使うより、神がその力を行使したほうが安全性が高い」

現場に近づかなくて済むからということだろう。

「それに、気になるのはマリアノ女史が行方不明です」

キトもカルーアも、さつと顔が暗くなった。特にキトは、先ほどのカルーアの時のようにずしんと胃が重くなった。

「今日、マリアノさんはここに来ていたのですか？」

「ええ」

「じゃあ、探しに行こう。先生、それくらいいいだろ」

キトは即決し、一応ドクターにお伺いを立てた。

「いいですが、建物の倒壊には十分注意してくださいよ。神を呼び出して、彼女達に守ってもらってください」

術法研究所の建物は、窓枠が一部落ちたりしているものの、建物全体は無事を保っているように見える。

建物に入りながらキトは気付いた。

サクラと、親父だ。

あの二人はどうしているだろう。特に、大きい建物にいる親父の方が心配だ。

かといって、今更その二人を先に探しに行くとは言えない。

ここはひとつ、カルーアも自分もそれぞれの家に帰ったほうが得策ではないだろうか

持ちかけてみるか。

「カルーア、待った、お前、一度家に帰ったほうがいいよ」

「どうして？」

「実はおれ、カルーアに会いたくてカルーア家に行ったんだ。そのときに地震が起こって：屋敷が崩れ落ちたんだ。火事も起こって、それはおれが鎮火させて人も一人助けたんだけど：他には何もできなくて：」

カルーアは一瞬だけ表情を固くした。だがすぐに言った。

「いや、いいよ。すぐに助けられる人を優先すべきだ」

「だけど：」

キトが言うのも聞かずに、カルーアは術法研究所の入り口へとずんずん歩いて行ってしまったので、仕方なくキトもついていった。

術法研究所入ってすぐのゲートには、いつも首輪を貸し出してくれる、寶石の神ホージュの術者トトもいなかった。当然二人は首輪などせず、ウオーラとカーミラを实体として呼び出したまま中に入っていた。

既に研究所の中には無事でいる人員が救助活動を行っていて、人の声があちこちから聞こえてくる。

「ピルスーリの存在は感じる？」

「分からないわ。でもかすかに…上の階かしら…」

カーミラは目を閉じて答えた。

「図書館かもしれない」

カルーアが言った。キトは知らないが、紙の神であるピルスーリを物神として持つマリアノは結構な読書家でもある。

図書館は一階から四階まであったが、マリアノがよく詰める場所が三階だということで二人は崩れかけた階段を上って三階に行った。

「マリアノさん！」

廊下は割れた窓ガラスが散乱している。きしっ、ぎぢっ、と音を立てながら二人はゆっくりと歩いていく。その前を、二神がゆっくりと飛んでいく。

「ここかも」

ナンバー三十六と書かれた部屋のところでカルーアが言った。

扉が閉まっていたので開けようとしたが、開かない。カルーアはノブを持ったまま乱暴に肩ごとドアにぶつかった。やっとのことでドアが中側に開いた。

中に入ると、見事なまでに本棚が奥側に向かってドミノ倒しになっていた。二人はその隙間のひとつひとつを覗いていった。どこもかしこも、倒れた本で向こう側が見えないまではない。この下敷きになっていたら、気絶してもおかしくないだろう。

「マリアノさん！」

一番奥に到達しても、声が聞こえる気配もないし、ピルスーリも見えない。二人は次の本棚のブロックに移動した。

「マリアノさん！」

「マリアノさんは、おれの恩人なんだ。絶対に助ける」

キトは本棚の隙間を覗き込むだけではなく、本の山をかき分けてマリアノを探し始めた。カルーアはカルーアで考えがあるのか、そのまま声をかけて隙間を潰していった。

「マリアノさん！」

「マリアノさん！！」

本をかきわけて探すキトの額に、うっすらと汗が滲み始めた。

「ねえ」

カーミラが言った。

「後先考えないでいいのならば、この本を燃やしてしまえば？」

キトより大分先の本棚の隙間を覗き込んでいたカルーアは、静かに首を横に振った。

「いいから、カーミラもかきわけてくれよ」

「んもう」

カーミラはしぶしぶキトの作業の手伝いをしだした。

カルーアは実はピルスーリを探していた。絶対に近くにいるはずだと思ったのだ。彼女ならば、本をかきわけなくても姿の見えるところにいるだろう。

絨毯爆撃のキトは、いまやぜいぜい言いながら重くて固い本と格闘していた。

カルーアは二番目の列を探し終え、三番目の列の最初の場所に移動していた。キトは相変わらず二番目の列の本をかきわけていた。

「ねえ、キト」

「今度はなんだよ」

「とりあえず、この本棚は全部起こしたほうがいいんじゃない？ そうすれば本も本棚にしまえるわよ」

「そうか！」

キトは走って入り口の方の、一番上になっていて本棚の場所に戻った。

「カルーア！」

カルーアも最初の列の一番上の本棚の場所に走って戻ってきた。

「せーの！」

本棚は重く、びくとも動かなかった。理由としては、一番上の本棚には倒れて上面になった側には本が詰まっているからだだった。

「私達も手伝うわ」

カーミラとウオーラも床に足をつけて本棚に手をかけた。

「せーの！」

「よ！！！！」

ガダン、と音がして本棚が戻り、外側の本が何冊かバラバラと落ちた。

隙間が大きくなった本棚の間を見ると、本の山の頂上から白い手が出ていた。その手は、マグカップを持っている。

「マリアノさん！！」

キトとカルーアは同時に叫ぶと、本を片っ端から両側の本棚に詰め始めた。

マリアノは仰向けに倒れていて、顔に大きなあざができていた。全く動く気配もない。

「大丈夫。息はあるわ」

カーミラが言った。神特有の能力なのだろう。

カルーアはため息まじりにマリアノの首に手を伸ばすと首輪を外して床に放った。紙の神、ピルスーリが現れた。

「どうもありがとう！！ もうどうしようかと思つていたところだったの！！」

「どうしてここは、神の幻影を出してはいけないなんてルールになつてるんだらうな」
キトが毒づいた。

「う……」

「マリアノさん！」

マリアノが頭を抱えて起き上がった。顔のあざが痛いらしい。

「あんたたち……まさか、助けに来てくれたの？」

二人がうなずき終わらないうちに

「ありがとう！」

マリアノは二人を両腕に抱いた。普段の振る舞いからは想像もできないようなふわりとした女性の香りがして、カルーアも、キトも思わず顔が赤くなった。

「他は大丈夫なの？」

「とりあえず僕らが知る限りでは、ウインダム所長とドクター・クリスは無事です」

「それならなんとかなるかもね。この部屋には私しかいなかったよ。だからこれ以上探す必要はない」

次の瞬間、マリアノは物凄い形相になった。

「あんたたち、こんなところにいる場合じゃないわよ！！ 自分達の家に帰りなさい！！

家族が無事か確認してきなさい！ 今すぐに！！」